

建築士事務所の全国ネットワーク

# 日事連

2014 JULY

VOL.52,NO.609  
JAAF MONTHLY MAGAZINE



特集——

## 高齢者施設の現在

暮らし続けるまちのデザイン





# まちと自然につながる 拠点のデザイン

地域における包括的な支援やサービス体制の構築には、従来の集約型施設ではなく、施設を小規模多機能化して地域内に分散させる仕組みづくりが重要となる。介護施設が地域の中に点在し、住民により身近な存在となるとき、どのような建物の設計が求められるのだろうか。地域包括ケアシステムを10年以上前から推進してきた新潟県長岡市のサポートセンターを例に、建物の役割を考える。



サポートセンター摂田屋外観。他のサポートセンターと同様に、入り口には看板を設けない

## 中学校区をベースに拠点を計画

暮らし慣れた地域の中で、バリアフリーの住環境と24時間365日のサービスを提供する——長岡福祉協会のこの構想を形にしたのが、サポートセンターと呼ばれるケア拠点である。平成14年（2002）に三和地区に開設したサポートセンターを皮切りに、すでに18のサポートセンターを開設してきた。

サポートセンターは、小規模多機能型居宅介護、地域密着型介護老人福祉施設（サテライト型特別養護老人ホーム）、在宅支援型施設（バリアフリー住宅）、定期巡回・随時対応型訪問介護・看護などさまざまな機能を併せ持った複合施設である。同協会では、中学校区の範囲を対象に、その地区に必要なサービスを組み合わせ、各センターを計画している。

既存の特別養護老人ホームを地域に分散した最初のモデルであるサポートセンター美沢をはじめ、長岡市のサポートセンターを数多く設計しているのが、高田建築設計事務所（新潟会）である。近年では、サポートセンター摂田屋やサポートセンター川崎を設計し、好評を得ている。

## 中越地震の経験が まちづくりの観点につながる

サポートセンター摂田屋は、「リプチの森」という48区画からなる分譲地の中に計画された。不動産部門を併設する同社では、リプチの森のまちづくりを進める中で、福祉施設も一緒につくるという発想に至ったという。その理由を高田清太郎代表は次のように話す。

## サポートセンター摂田屋

サテライト型の特別養護老人ホーム（定員 20 名）、小規模多機能型居宅介護（登録 25 名）、カフェテラス、キッズルームなどからなる複合型センターで、介護保険サービスだけでなく、地域住民も気軽に活用できる場となっている。自宅から近い場所での生活の維持や住み替えによって、地域内で人々とのなじみの関係が継続できる。



1階特別養護老人ホームの個室を外から見る。個室はそれぞれ異なる方向を向き、住宅地である周辺環境とも自然になじんでいる



地域交流室・小規模多機能のスペースを合わせて催された保育園のクリスマス会

サポートセンターのテラスのペンキ塗りは、近隣住民の恒例行事となりつつある



小規模多機能スペース。和室があり、くつろげる空間となっている。「泊まり」にも対応するため、スペースを囲むように個室が配置されている

1階特別養護老人ホームの個室。外から直接入れ、玄関とポストがあり、鍵は利用者が持つ



「リプチの森」パース

「平成 16 年（2004）の新潟県中越地震のときに、仮設住宅建設の依頼を受けました。その経験から、人がケアを受ける場所を考えたとき、大きな体育館に集まるのではなく、それぞれが住む地域の中にあることがいいと思ったのです。リプチの森の福祉施設も、そういう場所になるように考えました」

ちょうどそのころ、リプチの森がある摂田屋地区でサポートセンターを開設することになり、そのままサポートセンター摂田屋（p.8）の設計につながっていった。設計の際に依頼されたのは、大きなビルを建てる

のではなく、「住宅をつくってほしい」ということであった。さらに入り口に看板を設けないことも条件であった。周りの住宅との関係性や平屋であることから、自然と一軒一軒が肩を寄せ合うような小さな住宅の集合体が施設の形になっていった。

定員 20 名の地域密着型小規模老人福祉施設（サテライト型特別養護老人ホーム）は、それぞれ 10 戸ずつ東西に分かれ、2 戸ごとにそれぞれ異なる角度に向いている。その中央には共同生活室があり、ホールを通じて地域交流室やカフェテラス、浴室などに行き来する。特筆されるのは、各戸に設けられた玄関とベランダである。居住者はセンター全体の玄関、東棟・西棟にあるサブ玄関、各戸の玄関の 3 つが利用でき、各人で鍵を持っている。

「各戸に玄関があれば、他の人と会わずに、ご家族の方が直接利用者を訪ねることができます。ふらっと立ち寄れる自然さがあり、人間同士の微妙なプライバ

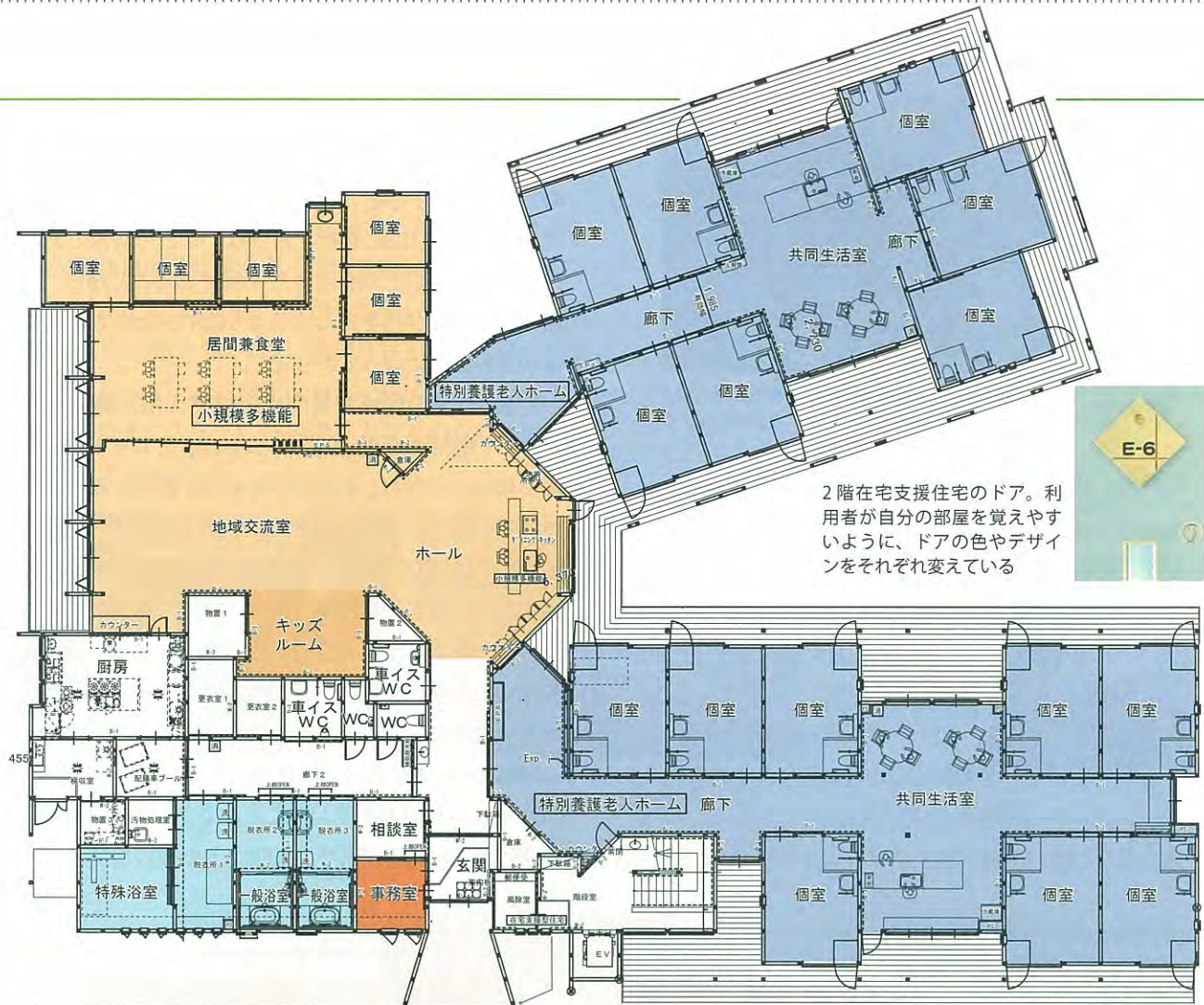
## グループホームこぶし摂田屋 ユニバーサルハイツ摂田屋

1階は、認知症になってもできる限り住み慣れた地域で暮らしたいという希望を叶えるため、明るく家庭的な環境を重視し、地域との結びつきを大切にされたグループホーム。2階の在宅支援型住宅は、要介護高齢者・虚弱高齢者が利用できるバリアフリー環境の住宅。



立面を分割し、街並みになじむ外観とした

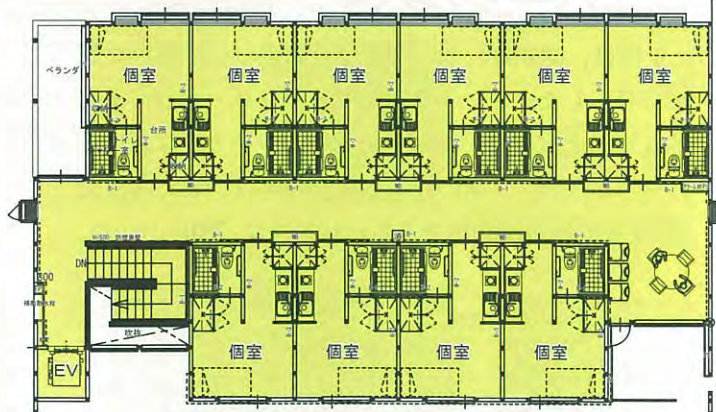




1階平面図



1階特別養護老人ホームの共同生活室。簡単な炊事ができるキッチンがあり、廊下と一体になっている



2階 在宅支援型住宅 平面図



サポートセンター川崎外観。1階の特別養護老人ホーム(右)は、個室から外のテラスに出ることができる

## サポートセンター川崎

要介護認定を受けた人で、自宅での介護が困難な近隣住民が住み替えることができるサテライト型の特別養護老人ホーム(定員15名)と、「通い」「泊まり」「訪問」を組み合わせたサービスを1カ月定額で提供する小規模多機能型居宅介護、カフェテリア、キッズルーム、2階の在宅支援型住宅(10室)からなる複合型センター。



高田建築設計事務所の高田清太郎社長と企画課長の神林弘子さん

シーに配慮しています」(高田代表)

ホールにはバーカウンターが設けられ、その北側の地域交流室にはキッズルームが併設されている。バーカウンターは、地域住民が自分で飲み物を持ち寄るため、自然と憩いの場になるという。また、この地区から児童館へは徒歩で30分以上かかるため、学校帰りの子どもたちがここに集って勉強したり、遊んでいることも多い。

## 暮らしの目線で空間を考える

地域交流室の東側にあるのが、小規模多機能のスペースだ。「通い」「泊まり」「訪問」を組み合わせたサービスであるため、6室の個室も設けられている。地域交流室との間仕切りを収納すれば、一つのつながった空間となり、近くの保育園のクリスマス会などもここで催されている。

さらに近くには、認知症のグループホーム(定員9名)と車イス対応の居住を提供するバリアフリー住宅がそれぞれ階を分けて建てられている。小規模多機能型居宅介護事業所が隣接することで、居住者や家族の安心にもつながっているという。

現在、有料老人ホームの1人あたり居室面積は13㎡以上(廊下幅を緩和する場合は18㎡以上)、サービス付き高齢者向け住宅の場合は25㎡以上(共同居住型の場合は18㎡以上)と規定されているが、長岡福祉協会の小山剛理事にはもっと面積を大きくするようによく言われるという。

「小山施設長から、やっぱり45㎡くらいは欲しいねとよく言われます。1人で使うには広すぎると思われるかもしれませんが、45㎡の中にキッチンやお風呂

もあれば、家族が訪問したときに、お茶を沸かして飲んだり、ちょっとした料理をつくって部屋で食べることができます。設計者としてこれを実現するのはなかなか難しいですが、こういう目線で暮らしを見ているんだと、とても共感できます」(高田代表)

## 片道3km以内の住み慣れた地域に小規模多機能型居宅介護を設置

住宅地にある摂田屋と異なり、サポートセンター川崎(p.10)は国道8号の近くにあり、隣地の商業施設に負けないようなボリュームの建物である。1階の地域密着型小規模老人福祉施設(定員15名)は2棟に分かれ、ウッドデッキを通してそれぞれの個室の気配を感じることができる。各棟の軸の交点にホール、地域交流室、小規模多機能スペースが配置され、中の廊下を歩けば、さまざまな光景が広がり、まちの中を歩いているような感覚になる。2階には、10室の在宅支援型住宅が設けられている。

「利用者は、片道3km以内の住民の方がほとんどです」と、サポートセンター川崎管理者の佐藤佳代さんは言う。

「地域内にあることで、家族の方がちょっと顔を見に来たり、お友達の方が遊びに来たりして、地域の中での密着度が高くなっていると思います。また、小規模多機能型居宅介護が近くにあることで、家族の方の安心にもつながっています。これまではまったく知らない地域にショートステイに行ったりしていたのが、近くなることで、もしかしたら今の家に暮らし続けることができるかもしれないという自信につながっていくと思います」

近年、高齢化社会を見越し、サービス付き高齢者向け住宅が多く建てられるようになったが、利用者の視点に立てば、建物が基準を満たすことだけでなく、サービス体制の構築が不可欠である。建物単体だけではなく、地域の中でどういう役割を果たすかを考えることが設計者にも求められている。

(写真提供: 高田建築設計事務所)